

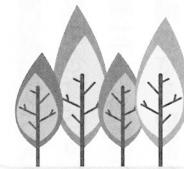
生きる意味 生きるから

“終わり”が あるということ

第14回

花園大学

はし もと かず あき
橋本和明



物事には始まりがあつて、終わりがある。野球やサッカーの試合でも、映画や小説の作品においても始まりと終わりがある。人の命だって同様、誕生という始期があつて、死という最期を迎える。いくら不老不死を懇願しても、どんなに健康で長生きしたとしてもいざれは終わりを迎えて死んでいく。今回はこの“終わり”について考えてみたい。

終わりというと、誰しも真っ先に死というイメージを思い浮かべやすい。そして、この死という終わりに不安や恐怖心を抱く。もちろん、私もその一人である。

しかし、終わりを違った角度から考えてみれば、どれだけ人々はこの終わりに助けられ

たり、救われたりしていることか。例えば、

病気で長患いをしている人にとっては、終わ

りがあることは苦しみから解放されること

でもある。戦争の最中にいる人はたとえ敗北

であつたとしても戦いが終わってしまうこ

とに一時の安堵が伴う。あるいは、何かに執

着して生きざるを得なくなり、どうしてそこ

までこだわらなければならぬのかと自分

で苦悩する。そんな時にどこか終着点が見つ

けられれば、それによつてふんぎりが付けら

れることだつてある。結果が望ましくなくて

も、このような心理におちいるのは、一旦終

わるという意味がこれまでの何かから解放されるという意味がこれまでの何かから解放さ

る。結論を先に述べれば、私は「生きる」

ような終わりでありたいと願うのである。己の生をまつとうするという意味である。ただ

似たような表現に「生き抜く」がある。それ

はどちらかというと辛い過酷な状況でもそ

れに耐えて生きていくというニュアンスが

強い。つまり、この「生き抜く」の言葉の先

には生の連続性が仮定され、生きることに力

点が置かれている。しかし、私は先に述べた

意味で終わりを捉えているため、「生き抜く」

というよりも「生ききる」の方がピッタリく

る。これには与えられた命を最後まで使い切

り、「後にも先にも何もないという終わり」

が強調されている。そこには最後まで生きた

というその人の意志の重みが感じられ、終わ

りというテープを切った達成感、あるいはすがすがしさがある。

「～抜く」と「～生きる」の違いは、例示と

して、「やり抜く」と「やりきる」、「走り抜く」と「走りきる」などがある。いずれも前者の

「～抜く」は現在進行中の表現で今もその状

態が続いていると考えてよい。他方、後者の

「～生きる」は現在完了形の表現で、今はその状態をひとまず終了し、現在とは連続性を断ち切られた状態を示しているといえよう。

このことを私の専門である心理臨床の世界に引き寄せるとするならば、終末医療の患者さんへのターミナルケアのあり方がここに集約される。余命がいくばくもない人を前

に、「もう少しの辛抱ですから、一緒に頑張りましよう」などの励ましや声かけがむなしを感じことがある。今ある痛みを堪え忍び、先に回復の道が開けるのなら、「どうか生き抜いてください」と言うのもいいかもしれない。けれども、回復の道が閉ざされ、あと少しで与えられた命を燃えつくそうとしている人をして、「どうか生き抜いてください」というよりも、「どうか生ききつてください」そのお手伝いをさせてください」という方がより臨床的であろう。

終わりがあるから頑張れる、終わりがあるから救われる、という終わりのあることへの安堵が逆説的には生き方の底力となる。そし

て、それが終わりの迎え方としての「生き生きる」へと動かす。しかし、いざ終わりを前にしてどのようにがき苦しむのか、あるいは終わりに直面して恐怖心を抱いて生に未練を残して死んでいくのか、そのときになればわからない。ただ、今からイメージだけは少し持つておきたいものである。

橋本和明
大学を卒業後、二十年以上も家庭裁判所で調査官として勤務し、少年事件や家事事件などの非行や虐待などの臨床に携わってきた。二〇〇六年から花園大学に奉職。臨床心理士。